

学校改善プロジェクト

—互いに学びあう学校づくり—

研究部 高橋 栄一

昨年度より、本校では「学校改善プロジェクト」という新しい研究に着手している。この研究は自主自律の校風、教師と生徒の温かな人間関係、真理探究に対する謙虚な態度といった本校の伝統を継承し、さらに充実・発展させつつ、若手・熟練教員、下級生・上級生、学年団、そして学校全体が豊かなるために、互いに学びあう学校をつくって行こうという多様な目的を持っている。昨年度は「授業」、「進路指導」、「生徒指導」、「部活動」、「学校広報」という5つの具体的な改善プロジェクトを実施した。各プロジェクトは教員が主体的に参画しつつ、現状の課題を共有し、その改善に向けた方策を検討し、協働で取り組みながら、その実践を可視化し省察するシステムとして位置付けられている。規模が小さく、教員・生徒間の意思疎通が図りやすい本校は、本来的に学びの共同体としての基盤を有しており、本プロジェクトは本校の真骨頂を十二分に発揮する可能性を持っている。今年度は「授業」、「生徒指導」、「不適應生徒対策」、「学校開放・地域連携」、「担任業務・学年運営」を立ち上げで、遂行中である。

キーワード：学校経営 学校評価 学校改善

1. はじめに

昨年度より、本校では「学校改善プロジェクト—互いに学びあう学校づくり—」という新しい研究に着手している。これは、教員どうし、生徒どうし、教員と生徒が互いに学びあう共同体を形成し、学校共同体の成員の一人ひとりが成長するとともに、システムとしての学校全体も同時に豊かになることを目指している研究である。自主自律の校風、教師と生徒の温かな人間関係、真理探究に対する謙虚な態度といった本校の伝統を継承し、さらに充実・発展させつつ、若手・熟練教員、下級生・上級生、学年団、そして学校全体が豊かなるために、互いに学びあう学校をつくって行こうという多様な目的を持つ研究である。各プロジェクトは教員が主体的に参画しつつ、現状の課題を共有し、その改善に向けた方策を検討し、協働で取り組みながら、その実践を可視化し省察するシステムとして位置付けられている。

規模が小さく、教員・生徒間の意思疎通が図りやすい本校は、本来的に学びの共同体としての基盤を有しており、本プロジェクトは本校の真骨頂を十二分に発揮する可能性を持っている。昨年度は「授業」、「進路指導」、「生徒指導」、「部活動」、「学校広報」という具体的な改善プロジェクトを実施した。今年度は「授業」、「生徒指導」、「不適應生徒対策」、「学校開放・地域連携」、「担任業務・学年運営」を立ち上げで、遂行中である。

2. 職員研修会

この学校改善プロジェクトが開始される発端は、昨年度末に実施された校内の「明日の附属高校を考える」ワークショップ型研修会（2012.2.29）に遡る。この研修会では、年齢構成・教科などのバランスを考慮し職員を4つのグループに分け、グループごとにワークシート（資料1・2）を用い、KJ法によっ

て、本校の良い点、改善を要する点などの意見を出し、発表し合った（写真1, 2）。後日、総務部でそれらの意見を整理し、本校の継承すべき良い点、改善を必要としている点などまとめ、職員全員で共有した。

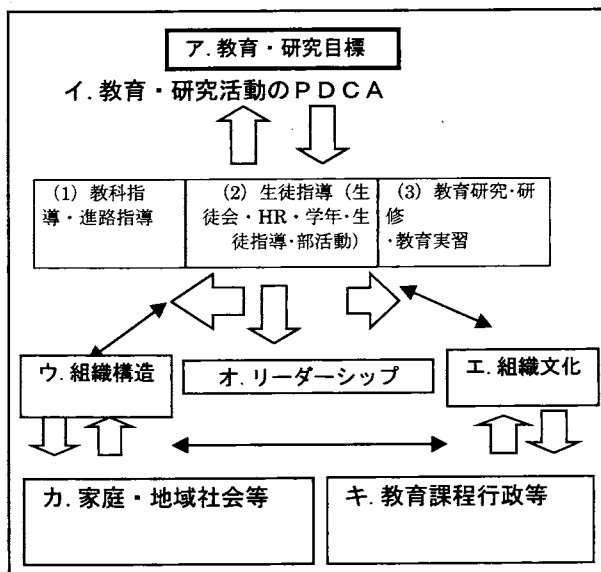
そもそもこの研修会が持たれた理由は、教員間の意思疎通が十分でないという認識があったからである。近年、本校教員が若手と熟練のふた山で中間層が少ないというバランスを欠く年齢構成になった。生徒指導観や学校経営に対する教員間の意識の差などが大きくなっていった。元々本校は教科ごとの研究室に教員が配置されており大職員室がない。職員会議の時以外は全員が集まる機会がなく、毎朝の職員伝達もない。そのような環境では、十部に話し合いながら意見の調整をするということが難しい状況が続いていたためである。

研修会では忌憚のない意見や建設的な意見などが沢山出て、刺激的な会となった。この研修会を行って、また教員間の共通認識や意思の疎通が図られたため非常に有意義なものとなった。が、その後、その意見を集約し、それらをどう学校運営に取り入れ生かしてゆくのか、具体的な方法が十分検討されないまま、その必要を感じながらも、課題として残された。結局、善後策は研究部に全権付託されることになった。

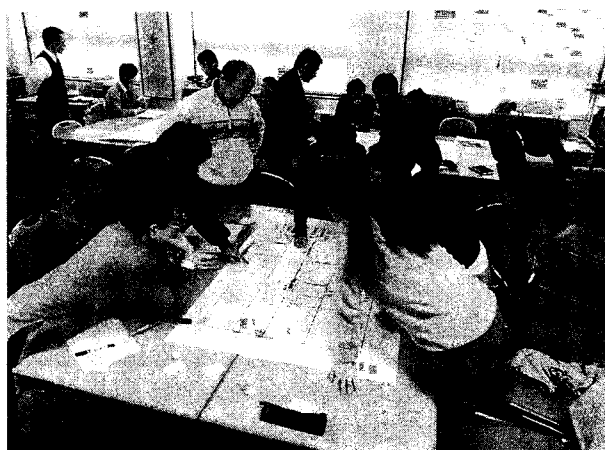
マトリックスシート①

	附属高校の優れた点	附属高校の改善点	改善の手立て
教科指導・進路指導			
生活指導 (HR・学年・生徒会・生活指導・部活動)			
教育研究・研修・教育実習			
学校組織 (組織構造・組織文化・広報・外部組織)			

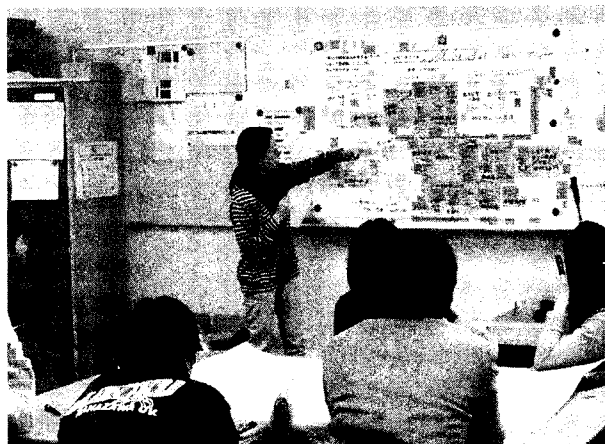
カリスマモデルシート②



※田村知子『実践・カリキュラムマネジメント』を参考



(写真1) 職員研修会1 KJ法



(写真2) 職員研修会 グループ発表

3. 学校改善プロジェクトの立ち上げ

その後、何度か研究部や職員会議での協議を重ね、

今般の「学校改善プロジェクト」という形で改善に向けての実践が行われることになった。その際、各プロジェクトは、次の5つの原則に基づいて実施することが確認された。

- ①各プロジェクトは希望調査を実施しチーム編成を行うこと。
- ②チーム編成は教員の年齢、教科、職歴などを考慮しバランス良い構成にすること。
- ③チームリーダーは、なるべく若い教員を充てること。
- ④現校務分掌の主任は、同質のプロジェクトには参加しないこと。
- ⑤PDCAサイクルを念頭に改革案を作成し、今年度からできる範囲で改革を試みることに。

教員の希望を優先したのは、より主体的にかかわってもらうためである。経験豊かな教師は一方で過去の因習に捉われやすい。リーダーを若手にしたのはフレッシュな感覚や斬新なアイデアを期待したことに加えて、若手に責任を持たせることで、より主体的に学校運営に取り組むことのできるのではという期待があったからだ。現校務分掌の主任を外したのも現実を鑑みすぎて自由な発想が制限されるのを嫌ったからである。また、PDCAサイクルを取り入れたのは、より実行力のある具体的な活動を目指したからである。

これらの原則を踏まえて、研修会で出された意見を集約した結果、昨年度は次の10のプロジェクト候補が示された。

- ①授業改善プロジェクト※
- ②進路指導改善プロジェクト※
- ③部活動活性化プロジェクト※
- ④生徒指導改善プロジェクト※
- ⑤学校広報改善プロジェクト※
- ⑥不適応生徒対策改善プロジェクト
- ⑦総合学習改善プロジェクト

- ⑧生徒会活動活性化プロジェクト
- ⑨大学との連携研究強化プロジェクト
- ⑩学力向上プロジェクト

以上の候補について、教員に希望調査を実施した結果、今年度は上記①～⑤の5つのプロジェクト（※）を実施することとなった。各プロジェクトと構成メンバーは表1のとおりである。

表1. 各プロジェクトとメンバー構成

	構 成 員 (◎プロジェクトリーダー)
授業改善プロジェクト	◎渡會兼也 (理科・物理, 総務部, 進路指導部, 情報部)
	外山康平 (数学科, 進路指導部, 三年担任)
	鈴森達也 (英語科, 生徒指導部, 研究部, 教務部)
	島村潤一郎 (国語科, 二年学年主任)
	高橋栄一 (地歴科・地理, 研究部主任, 教務部)
学校広報改善プロジェクト	◎川谷内哲二 (数学科, 情報部主任)
	戸田 偉 (数学科・教育実習部主任, 生徒指導部, 二年生担任)
	横野健二 (英語科, 生徒指導部主事)
	樫田豪利 (理科・化学, 進路指導部主事)
進路指導改善プロジェクト	◎隅のどか (養護, 保健部)
	塚田章裕 (地歴科・世界史, 進路指導部, 三年担任)
	山本吉次 (地歴科・日本史, 総務部)
	川崎繁次 (保健体育科, 進路指導部, 三年生学年主任)
部活動活性化プロジェクト	◎前田健志 (公民科, 生徒指導部, 保健部, 一年生担任)
	大島 崇 (数学科, 教務部, 研究部, 一年生担任)
	風間重利 (国語科・総務部主任, 主幹教諭)
	奥村郁子 (国語科, 教務部主任)
生徒指導改善プロジェクト	◎鈴木清貴 (保健体育科, 教務部, 生徒指導部, 教育実習部)
	千澤奈緒子 (英語科, 保健部主事, 二年担任)
	藤田久美子 (保健体育科, 教務部, 生徒指導部, 保健部)
	深田和人 (理科・生物, 一年生学年主任)

4. 各改善プロジェクトの取組

各プロジェクトは原則以下の手順に従って実施された。

- ① 課題・改善すべき点を明確にする。(KJ法などによる)
- ② 課題を整理し、改善策を講じる優先順位を付け、今年度取り組む課題を決定する。
- ③ 様々な改善策を出し合う。
- ④ 出し合った改善策を精査し、実施可能な行動計画として見通しを立てる。(仮説を立てる)
- ⑤ 実際の行動による仮説を検証、検証方法の検討・精査。
- ⑥ 今年度の取り組み対して、生徒または教員にプロジェクトの成果を問うアンケートを実施し、その結果をまとめる。
- ⑦ 今年度の省察と、新たな課題の発見、次年度への課題・要望などをまとめる。

以下に昨年度実施された各プロジェクトの経過と成果について以下に示す。

4-1 授業改善プロジェクト

◆経過

第1回会議（9月14日）

『授業改善プロジェクトの意義とKJ法によるブレインストーミング』

本プロジェクトに参加した教員が日頃から感じている授業についての課題や問題点を幅広く取り上げ、内容をKJ法で整理した。各教科の様々な視点から問題点について意見や情報が交換・共有された。中でも、それぞれの教員が授業スタイル（方法）について自身で問題点を認識しながらも変えられない現状が多く挙がった。これらの問題点を基に、具体的に何をすべきか？を次の会議で議論することになった。

第2回会議（10月11日）

『今年後の授業改善で何をするか』

前回の内容を振り返り具体的な活動の見通しを立てた。方針は以下の通りである。

- ① 授業改善PJのメンバー5人で一度授業を見て記録を取ることから始める。
- ② 1回目公開授業は11月中に行い、個人の反省とメンバーの意見を踏まえた上で1、2月に再度公開授業を行う。
- ③ メンバーの授業は複数人で見学する。
- ④ 公開授業では普段通りの授業をする（通常授業の改善が目的であるため）。
- ⑤ 授業が変容していく様子を個人がまとめる。
- ⑥ 可能なら生徒が学び合う活動が入る方がよい。
- ⑦ 自分がレベルアップするだけでなく、授業を見た人間もレベルアップできるような授業が学び合いとして理想。

○その他、今後の課題等

- ・(将来的には)大学の先生に関わってもらう可能性を模索する。
- ・公開授業をどう組織化するか。
- ・学び合いというプロセスの「可視化」をどう進めていくのか。
- ・最終的には生徒の評価も調べたい。
- ・将来的には常設プロジェクトとすることも検討したい。授業改善は高校教師にとって永遠のテーマである。ノウハウを引き継ぎながらやる価値はある。
- ・授業評価について。現在のアンケートの項目は学力向上の研究時に作ったものである。授業改善PJが評価につながればよい。将来的には評価の仕方について、言及したい。

第3回会議（12月7日）

『授業の感想と意見交換』

メンバーの授業見学を終えて、それぞれの立場から授業の感想を述べた。

○公開授業実施日

- | | |
|--------|--|
| 11月16日 | 2限 物理(2S1), 3限 数学(2S1) |
| 11月26日 | 3限 英語(1A), 5限 英語(1B),
6限 国語(2B), 7限 数学(2S2) |

11月27日 3限 国語(2C), 5限 物理(2S1),
6限 物理(2F)

11月30日 5限 地理(2L), 6限 地理(2S1)

○各教科からの意見

〔国語：島村〕

- ・文系と理系の違いを感じた。
- ・理系は生徒に前提となる知識を要求するので、理系は難しい。
- ・思い出そうとしている間に、時間が過ぎてしまう。
- ・教員は、生徒が自分の教科・科目だけをやっているように感じているけれども、生徒は多くのことをやらないといけない、ということに気がついた。

〔英語：鈴森〕

- ・(他教科の先生が)プリントを丁寧に作っていて感心した。
- ・試験前に読み物のプリント(躓きそうな場所)。
- ・質問コーナーを作るというアイデアがよかった。
- ・授業の1時間を短いコーナーに区切ることで、授業にメリハリを付けている。帯授業(最初の5分を作る。あとの授業とは区別)。
- ・生徒の疑問点を共有することが大事。

〔数学：外山〕

- ・文系の授業を見て、一体感を感じる事が大事と感じる。
- ・グルグルの際に、他のメンバーをどうするか、が課題。
- ・授業における一体感を感じられるか?を考えさせられた。
- ・グルグルをやったのは少し前から。できた生徒が他の生徒を助けるような活動が良いと思った。

〔物理：渡會〕

- ・文系の先生方は、授業方法が確立されていてすばらしい。
- ・文系教科でも生徒同士で考えて結論を出すような場面が作れないか。
- ・理系の授業にも生徒で共同作業をさせるような一

体感が欲しい。

〔地理：高橋〕

- ・どれだけ生徒を集中させられるか。
- ・隣としゃべる機会を作るといい。
- ・穴埋めを色チョークにしている。記号の使い方、色など、因果関係の工夫がよい。
- ・個々の生徒がバラバラ。統一感が欲しい。
- ・マイペースな解説。できれば生徒と共有したい。
- ・1人1人が楽しく参加。脱座学のチャレンジが良い。
- ・色々な授業に分かれていて、工夫されている。
- ・語りすぎではないだろうか。
- ・生徒と意見を戦わせることがあってもよい。
- ・国語の料理の仕方は難しい。

〔全体議論〕

- ・はじめは他教科の授業を見てもわからないのではないか、という危惧があったが、授業のやり方・進め方・スタイルは学ぶものがあつた。
- ・学び合うということをどうやってフィードバックできるかが課題。
- ・この授業見学は各教科が刺激を受けながら、基本的なところ、浅いところで見直すきっかけを与えている。その点で教員同士の学び合いができてい
- ・自分の授業の改善案を持ち寄り、次回提案する。授業参観→反省を何度か繰り返し、各自で改善案を探す。

第4回目会議(1月11日)

『各自が決めた授業改善の提案』

- 授業見学後の反省を踏まえて、メンバー各自が授業の改善案を提示し、再度公開授業を行う。生徒の主体性を引き出すだけでは駄目で、学び合いが含まれることも考える。以下にそれぞれの提案と公開授業の日時が書かれている。
- ・高橋：『質問用紙の使い方』
- ・外山：『多様な解答の仕方を生徒に考えさせる(課

題形式)』

- ・島村：『生徒に話し合いをさせる活動(記号問題)』
- ・鈴森：『グルグルの工夫』
- ・渡會：『Turning Pointの使い方』

○公開授業実施日

- ・地理：1月15日6限(2L), 1月22日6限(2L)
- ・数学：2月20日1限(2S1), 2月21日6限(2S2)
- ・国語：1月21日6限(2B)
- ・英語：1月16日4限(1C), 21日3限(1A)
- ・物理：2月13日5限(2S2), 14日5限(2F), 6限(2S1)

第5回会議(2月15日)

『授業見学の感想と意見交換』

改善された授業を見学した感想の意見交換を行った。特に、各教員が設定した課題の部分について話し合った。

〔地理：高橋〕

- ・はじめに生徒が出題する3問の小テスト。毎回、授業の感想や質問を書いて提出させる。生徒からのレスポンスがあると、次の授業に活かせる。
- ・自分自身の授業が変容していると感じる。

〔国語：島村〕

- ・集団で問題を解かせるのはおもしろい。
- ・毎回はできないが、たまに入れていくと良いのではないか。
- ・適度な難易度の問題を選ぶ。
- ・話し合っ行って行うことにはそれなりに意義がある。

〔英語：鈴森〕

- ・小中学校では斬新ではないかもしれない。
- ・本当のマイクにしても良いのでは？⇒マイクは合図の役目。本物にする必要は感じない。
- ・授業の2回に1回はグルグルをしている。
- ・進度は総合の1コマ分があるので問題ない。
- ・生徒同士の学び合い・競い合いが自然にできている。

〔物理：渡會〕

- ・クリッカーを用いた授業についてはどんな質問をするかがポイント。問題の理解度に応じた選択肢を用意すればよいのでは？
- ・生徒に意見を聞いてから、授業の展開が変わるとよい。つまり、問題に対する理解度を聞いてから、それによって説明を加えたり、省略したりできるはず。クリッカーを使うことで授業展開まで変わる。

〔数学：外山〕

- ・1つの問題に対して、色々なアプローチがあることを気が付かせることに成功した(グループ学習)。
- ・時間配分が課題。
- ・投票用紙の使い方が課題。

○その他、今後の課題等

- ・アンケートは答案返しの時に行う。
- ・28日までに個人の感想とファイルをまとめる。
- ・来年以降このプロジェクトをどうするか?についても議論する。問題・課題

第6回会議(2月27日)

『今年度の成果と反省』

○今年度の成果

- ・PJを通じて、メンバー全員に新たな発見があった。
- ・生徒が日常的に授業で受けている刺激を教員が認識することができた。
- ・授業に対する考え方が教員個々で異なることを理解し、それを自分の授業へとフィードバックさせる活動ができた。まさに、教員同士の学び合いができた。
- ・教員が生徒目線で授業を捉えることができるようになり、生徒の学習に対する指導や課題を再考するような機会になった。
- ・通常は定期考査でしか見ることができないような生徒の思考を可視化できた(教科もあった)。
- ・教員と生徒だけでなく、生徒同士、教員同士の

色々な学び合いの形を経験できた。

◆今年度の反省と課題

- ・限られた時間の中で授業見学や反省会を持つことが困難だった。特に授業見学の時間を確保すること、授業見学の徹底が課題である。
- ・教員の授業改善に対する、生徒の評価が十分に調査されていない。
- ・今後もこのPJを継続するための議論の時間がもう少し欲しい。
- ・1学期から課題の洗い出しを行い、課題を早期に見つけた上で授業改善に取り組む。
- ・授業改善の評価方法を確立する。
- ・教科のバランスを考えたプロジェクトの運営（多くの教科・科目の教員が参加し、多角的な視野で授業を捉えたい）。
- ・学校全体として継続的に取り組むための具体的な方策を考える（ローテーションの仕方など）。

◆プロジェクトに参加して（各自所感）

〈渡會兼也〉

授業改善プロジェクト主任の渡會です。このプロジェクトは当初、方向性も定まっておらず、ほぼ手探りの状態でスタートしました。しかし、参加メンバーは授業改善に対する意識が高く、普段とは全く違う授業展開のアイデアが多く出て、徐々にプロジェクトの方向性も定まっていきました。また、教科の垣根を超えた授業見学は非常に刺激的でした。ただ単に、他教科の授業見学から学んだ、というよりも、生徒が毎日どのような授業（刺激）を受けているかを認識できたことが、このプロジェクトの重要な発見と言えます。

よく考えてみれば、生徒が教員から大きな影響を受ける授業が教員にとっては最も重要な仕事なのですが、しかし一方で授業の改善は教員個人に任されている、というのが一般的ではないでしょうか。本来ならば、学校をあげて取り組むべき課題である、と思います。もし、この活動が継続的に行われ、教

員同士が学び合うことができれば、その活動が自然に教員から生徒に還元されてくものだと私は確信しています。次年度以降もこういった活動を継続させていきたいと思っています。

〈外山康平〉

もともと授業をより深めることを狙ってこのPJに参加しましたが、想像していたよりも刺激的で、授業を考え直す観点を数多く発見することができました。一番つよく感じたのは、教科の持つ特性であり、教科ごとに良さがあること、その良さの性質が違うことを感じました。特に、今回のキーワードである「学び合い」という要素を、数学という授業の中にどのように取り入れていくかには大いに頭を悩ませました。普段の授業の中では、一定の学習進度を確保していく一方で、なかなか生徒同士が「学び合う」場を設けられない現実がありましたので、生徒同士の相互作用を実現しながら、数学を教える難しさを感じました。

逆に、他教科の先生方にもわかる形で「学び合い」を実現する数学の授業とは何か？について深く考えさせられました。同じ教科の先生同士では、考えるきっかけが生まれなかったものでしたので、このPJならではの良さだったと思います。

自分にとっては、挑戦の意味合いが強い授業でしたが、まだまだ課題は多いものの、この先の可能性が十分に感じられる授業になりました。他の教科の先生方とよりよい授業について、議論した結果だと思えますし、このプロジェクトの素晴らしさがそこにあると思います。

このプロジェクトが決して単発で終わるのではなく、継続していくようになればいいなと感じています。

〈鈴木達也〉

授業改善プロジェクトの主要テーマである「学び合い」には、生徒同士だけでなく、教員同士の学び合いも含まれる。「学ぶ主体」である生徒らが学び

合うという姿は一般的にイメージしやすいが、では「教える主体」である教員が学び合うとは果たしてどのようなものなのか。本プロジェクトは、その問いから始まったと言える。

このプロジェクトが始まった当初、私自身は、「学び合い」というテーマを探るといよりは、自分にとって新しい試みであった「グルグル・メソッド」による発音指導を中心にした活動を他教科の先生方に見てもらい、いろいろと助言を得ようという心積もりでいた。いわば、教科指導の側面をあくまで優先させたのである。しかし、反省会にて「生徒同士が発音を教え合うような場面を作れないか」という提案があり、正直、頭を抱えてしまった。というのも、グルグル活動の性質や形態を考えると、生徒同士が発音をお互いに教え合う、またはお互いから学び合うといった場面は想定しにくく、あくまでも発音を指導するのは教員であると考えていたからだ。

しかし、幸いなことに、グルグル活動を続けるうちに、私の気づかないところで生徒同士が学び合っていることに、私ではなく、参観されている先生方が気づかれたのである。これはまったく予想外のことだった。クラスにはすでに正しい発音を身につけている生徒が何人かおり、そのような生徒たちは英文を覚えるのにも比較的時間がかからないので、その分だけ他の生徒に教える余裕ができる。生徒が輪になるとき、大体は仲の良いもの同士で並ぶため、できない生徒ができる生徒に発音のコツなどを比較的聞きやすいのだろう。このことに気づいてからは、正しい発音ができない生徒がいた場合、もし隣に上手な生徒がいれば、「ちょっとLの音、教えてあげて」とこちらから意図的に働きかけたりもするようになった。もちろん、こちらが指導するという第一次形態は変わっていないが、このように生徒同士が二次的な場面で学び合うことによって、グルグルの活動自体がより活発になったと信じている。かくし

て、偶然ながらも、自分の活動のなかでささやかな「生徒同士の学び合い」が発生していることに気づかされたのである。

このような成果が得られたのは、二つの要因によると思われる。一つには、プロジェクトチームが少人数の異なる教科の教員同士で構成されていたということ。同教科内では得られないような新鮮な視点も手伝い、話し合いが単なる「授業後の反省会」以上のものに発展した。もう一つは、「学び合い」という教科横断的な大きなテーマを中心に据えたこと。そのおかげで、私の場合は「発音指導ができるのは教員だけ」という固定観念を払拭できたのである。

このような長期間にわたる「教員同士の学び合い」は、私にとってはほとんど初めての経験であった。

〈島村潤一郎〉

当初思っていた以上の収穫がありました。教員の世界、特に大きな職員室がなく、個別の部屋に教員が入っている本校のような学校だと、他教科の様子が見えなくなってしまうがちです。他の進学校でよく聞くのは、とにかく自分の教科の成績を上げたくて、どの教科も大量の課題を出し、その結果、生徒の加重負担が生じてしまうというケースです。(ただ答を書き写して提出ということが起こるんだそうです。)[生徒は自分の教科科目だけを勉強していると先生は思っている]と言った生徒が昔いました。実際、生徒はいろんな教科科目の勉強をしているわけです。ある程度バランスを考えて、引くべきところは引くべきなのではという思いを強くしました。例えば、現代文。長期休暇の宿題として問題集をやらせるということを私はしていません。読書レポートぐらいのレベルで止めています。それも一つの手なのではないかと思いました。

それともう一つ思ったのは、教科科目の違う教員が話しあうことが刺激となり、授業のアイデアが生まれることがあるのだな、ということです。研究

テーマとして「複数教科科目のコラボレーション授業」というのも面白いかなと個人的に思いました。

〈高橋栄一〉

教科教育の研究は、教科によってかなり差があるように思っています。教具の開発や教授方法など緻密な部分まで研究が進んでいる教科もあれば、教材の選定、取り上げる内容そのものを吟味する段階に留まっている教科もあります。今回、この活動をしてみて、各々の教科では当たり前のことが他教科では新鮮に感じることもあるということを改めて認識しました。

そのなかでも特に「学び合う」こと自体に多様な方法があることに気がついたのは収穫でした。自分は社会科なので、生徒参加型の授業は比較的しやすいと思っています。それで、特別な仕掛けをしなくても、常に「学び合う」活動が組み込まれている授業をイメージして改善に取り組みたいと思ってきました。その意味で今回の活動はではそのヒントを沢山得られたと思います。

自分の授業改善のポイントは毎時間の小テストに質問・意見コーナーを設けたことです。毎時間ごとにリアルな生徒の反応が得られ、すぐ次の授業からその反応を生かすことができます。生徒も熱いうちに疑問の解決ができ、理解力向上につながると考えられます。中には、耳の痛い指摘もありますが、それは真摯に伝えてゆく勇気を持つように心がけています。

現場に身を置く教師として、授業改善のための不断の努力は必然だと思います。その意味で各プロジェクトのうち、この授業改善プロジェクトを軌道に乗せることは、本校で最も基本的で重要な課題であると思っています。それで研究部主任として、是非このプロジェクトに参加したいと思っていました。結果として、教科を越えて「学び合う」ことは、思った以上に重要であることが体感できました。教科を越えることによって、他教科がそれぞれどのよ

うな刺激を生徒に与えているのか、生徒が高校という空間の中でトータルとしてどのような刺激を受けながら生活しているのかを、改めて客観的に考える機会になりました。教育は総合力であるということを実感として認識することができたのは、今後の生徒指導に当たって活かしていきたいと思いました。今後は、この活動をどのように教師全員に広げていくのか考えていかなければならないと、改めて感じています。

4-2 進路指導改善プロジェクト

◆経過

第1回会議（9月19日）

- ・本プロジェクトの意義と目的を確認し、当面の活動計画を話し合った。
- ・本校の各教員の活動（進路指導の場だけでなく、教科指導や行事の際の指導）がキャリア教育であることの気付き。
- ・各教員、教科でバラバラに実施している現状がある。統一感を持たせ、連動させる必要がある。体系化も必要。

第2回会議（10月11日）

- ・本校の進路指導・キャリア教育の現状での良い点および改善が必要な点とその手立てについてKJ法を実施。
- ・各教員に、教科指導で実施しているキャリア教育についてアンケートを実施し、その結果を元にモデルを作成する予定。

第3回会議（11月20日）

- ・学校行事とキャリア教育について話し合う。
- ・学校行事を各自分担しキャリア教育の視点でねらいや現状についてまとめる。

第4回会議（12月12日）

- ・学校行事とキャリア教育について話し合う。

第5回会議（1月10日）

- ・学校行事とキャリア教育について話し合う。

第6回会議（2月5日）

- ・学校行事とキャリア教育に『基礎的・汎用的能力』と対応させたものを持ち寄り、話し合う。
- ・1年は文理選択前、2年は進路選択前に面談できるように、面談シートを作成するという案が出る。

第7回会議（2月19日）

- ・面談シート、学部紹介、自叙伝の復活について話し合う。

第8回会議（2月26日）

- ・1年2年キャリア教育プログラム、今までの研究の流れについて話し合う。

第9回会議（2月28日）

- ・発表資料の確認

◆本プロジェクトの成果

進路指導改善プロジェクトは学校全体の教育活動を、キャリア教育という観点で体系化できたということが、最大の成果である。これにより、それぞれの部署が、キャリア教育との関連を意識して教育活動ができるベースを作ることができた。また、本校におけるキャリア教育の全体像を構図化し整理することが出来た。（資料1、資料2）

以下、本プロジェクトで本校各種教育活動とキャリア教育との関係を示す。その際、文科省の提示するキャリア発達のための基礎的・汎用的能力との関係で位置付けを明示した。

ただし、各教科の内容・特別活動（特別合同授業・同窓生による特別授業・学問紹介）・保健指導については本稿では省略した。

(1) 生徒会活動、生徒行事とキャリア教育

- ・本校における生徒会行事の特徴

- ① 2年生が生徒会活動の中心。
- ② 教員が率先して指導やお膳立てをするのではなく、生徒の自主性に任せることによって、自覚と責任を身につけさせる。
→自然に、上級生に負けないものを作るという意識が生まれる。

- ③ 短期間の準備でクオリティの高いものを作りあげる。

〔生徒会全般〕

	行事の位置づけ	基・汎能力
1年	生徒総会などの行事に参加することによって、本校生徒の自主性に基づく生徒会活動を理解する。	②役割理解 ③課題対応 ④多様性理解
2年	生徒会活動の中心となって各種行事の企画・運営にあたる。	①コミュニケーション ②役割理解 ③課題対応 ④多様性理解
3年	後輩に生徒会活動の引継ぎ・アドバイスを行う。	①コミュニケーション ②役割理解 ③課題対応 ④多様性理解

〔運動会〕

行事の内容：玉入れや騎馬戦を含む、昔ながらの運動会。3年生の有志による応援披露が名物

	行事の位置づけ	基・汎能力
1年	高校入学以来初めての学校行事。2年生からの指示を受けて、生徒が中心になっての行事運営について学ぶ。用具の準備やプログラム原稿の作成および印刷製本の流れを掴む。	①コミュニケーション ③課題対応
2年	体育委員会が中心となって運動会の種目決定、生徒議会での承認、プログラム作成にあたる。各部活動に運営補助の依頼を行い、大会の円滑な運営の準備にあたる。また、クラスTシャツ作製に関する手配を担当して、業者との折衝にあたる。	①コミュニケーション ③課題対応 ④多様性理解
3年	有志により、本校伝統の応援披露を行う。	①コミュニケーション ③課題対応

〔スポーツ大会〕

行事の内容：クラス対抗の球技大会で、夏と秋の年2回行われる。種目は生徒の投票によって決定する。

	行事の位置づけ	基・汎能力
1年	運動会での経験を踏まえて、スポーツ大会運営の準備にあたる。2年生からの指示を受けて、用具の準備やプログラム原稿の作成および印刷製本にあたる。大会当日に掲示するトーナメント表の作成。	①コミュニケーション ③課題対応
2年	種目決定、生徒議会で承認、プログラム作成にあたる。各部活動に運営補助の依頼を行い、大会の円滑な運営の準備にあたる。大会当日の記録の整理及び進行の調整を行う。	①コミュニケーション ③課題対応 ④多様性理解
3年	特に作業はなし。	

〔歌の祭典〕

行事の内容：クラス対抗の合唱コンクール。

	行事の位置づけ	基・汎能力
1年	クラス単位の合唱を通じて、クラスの団結を深める。協調性を身につける。	①コミュニケーション ②役割理解 ③課題対応 ④多様性理解
2年	クラス単位の合唱を通じて、クラスの団結を深める。協調性を身につける。	①コミュニケーション ②役割理解 ③課題対応 ④多様性理解
3年	クラス単位の合唱を通じて、クラスの団結を深める。協調性を身につける。短期間の準備で、最上級生としてハイレベルな合唱を後輩に見せつける。	①コミュニケーション ②役割理解 ③課題対応 ④多様性理解

〔開校記念祭〕

行事の内容：本校最大の生徒会行事。企画から業者との交渉にいたるまで、生徒が行う。2年生のほとんど全員が関わる歌舞伎公演を行う。部活動単位の模擬店、体育館での催し物など

	行事の位置づけ	基・汎能力
1年	部活動単位の模擬店の活動に参加し、運営や接客の難しさを知る。	①コミュニケーション ②役割理解 ③課題対応 ④多様性理解

2年	2年生が主体となって運営する行事。部活動単位の模擬店運営。学年全体で本格的な歌舞伎公演を行うことによって、学年全体の団結を深め協調性を身につける。	①コミュニケーション ②役割理解 ③課題対応 ④多様性理解
3年	(模擬店等の手伝い)	

〔如月祭〕

行事の内容：2月上旬に行い、3年生を送る会という要素を持つ。1年生が主体となって運営する。1年生による演劇、クイズ、3年生へのビデオメッセージなど

	行事の位置づけ	基・汎能力
1年	1年生が主体となって運営する初めての行事。どうすれば3年生に喜んでもらえるか、様々な企画を練る。学年全体で演劇に取り組むことによって、開校記念祭での歌舞伎公演につなげる。	①コミュニケーション ②役割理解 ③課題対応 ④多様性理解
2年	部活動単位のビデオメッセージを作成	①コミュニケーション ②役割理解 ③課題対応 ④多様性理解
3年	(送別される側)	

(2) 担任指導とキャリア教育

	行事の位置づけ	基・汎能力
1年	4月 新入生オリエンテーション	①人間関係形成 ④生き方・在り方 ③計画立案
	7月 個人面談：1学期末試験を終えて将来を見据えて①(進路) 合同ホーム1学期を振り返る	
	11月 進路の考え方と決め方②(進路)	
	12月 個人面談 2学期末試験を終えて合同ホーム2学期を振り返る	
	1月 如月祭について進路を考えたコース・科目選択について③(進路)	
	3月 台湾現地学習にむけて	

2年	6月 将来への展望と基礎学力の充実に向けて④(進路) 7月 個人面談 1学期末試験を終えて 合同ホーム 1学期を振り返る 開校記念祭(歌舞伎)について 11月 大学受験に向けて⑤(進路) 12月 個人面談 2学期末試験を終えて 合同ホーム 2学期を振り返る 1月 進路を考えたコース・科目選択について⑥(進路)	④将来設計 ①チームワーク ③計画立案
3年	4月 本年度入試の状況と今後の予定⑦(進路) 6月 夏期の模試についてと1回目の進路希望調査⑧(進路) 7月 1学期を振り返り、夏休みをどう活かすか⑨(進路) 入試傾向説明(英語, 数学, 国語) 第1回学力検討会の実施 個人面談 1学期末試験を終えて、学力検討会の結果 8月 推薦入試の説明⑩(進路) 9月 センター出願と秋の外部模試について⑪(進路) 11月 センターまでの過ごし方と2回目の進路希望調査⑫(進路) 12月 第2回学力検討会(2日日程) 個人面談 学力検討会の結果について 1月 センター受験上の注意⑬(進路) 自己採点と二次に向けて⑭(進路) 国公立大学出願検討会 個人面談 出願検討会の結果を踏まえて予備校の選び方、受験報告書、各種調査の配付⑮(進路) 受験結果の集約	④将来設計 ③課題発見 計画立案 ②自己理解 自己管理

◆次年度への課題

進路指導プロジェクトでは、三年間を見通した進路指導計画を展開することを提言しようと考えている。特に、自らを知り、自らの成長と課題を認識し、将来の自己像を展望し、最終的には進路希望を達成してゆくという計画でありたいと考えている。そのためには以下の5つの点が重要である。

- ①入学時の自己を認識すること…自叙伝
- ②生徒会行事を通して自らの成長を認識すること…行事自己評価
- ③担任面談の進路指導計画の明示化
- ④進路指導行事の目的の明確化…学部紹介の改善
- ⑤二年生後半における進路意識付け

…レポート「学部決定に向けて」

このような考え方の上で、進路指導プロジェクトでは、次年度に向かって新たに取り組むべき事柄として、一年生予備入学時の課題として「自叙伝」を課すことを進言することとなった。

◆プロジェクトに参加して(各自所感)

〈隅のどか〉

キャリア教育の視点を持ち本校の教育活動を見直すことで、工夫を凝らした指導がすでに実施されていることを実感できました。また、生徒たちが大人になっていく高校生活の中での、先生方それぞれの温かい指導を見える化することができたことは大きな成果だと思っています。

今後は、金大附属高校では勉強だけではなく、社会人として生きていく力を身につけることができるということが内にも外にもわかりやすく伝わる工夫をできると良いと考えています。

〈塚田章裕〉

最初は、このようなプロジェクトを作ったの研究なんてうまくいかないと思っていた。しかし、教員自身が主体的に参加し、ボトムアップで学校を変えていくということはモチベーションが全然違う。プ

プロジェクトの会議で時間が取られることは嫌だったが、会議中は楽しく取り組むことができた。公立高校では、校長のトップダウンで様々なことが決定されていくことが多いが、教員はただやらされていることも少なくない。

現在、学校にも企業の論理が取り入れられてきているが、果たしてそれは良いことなのだろうか。本来、学校独自の文化というものがあるはずであり、最近そのような文化が壊れてきているような気がしてならない。

結果だけ見ると、本研究はそれほどたいしたものではないと思われるかもしれない。しかし、研究の過程において本校全体として得られたものは大きい。その部分を見ていただければ幸いである。

〈山本吉次〉

学校全体の教育活動を、キャリア教育という観点で体系化できたということが、最大の成果だと思います。これにより、それぞれの部署が、キャリア教育との関連を意識して教育活動ができるベースを作れたと思います。しかし、まだまだ、課題が残っています。特に二年生後半に、どう進路意識を高めるかです。自己のキャリア形成の中で、どう進学目標を定め、それに対して意欲を高め、目標達成のために突き進めるようなサポート体制が必要です。そのためには、生徒自身が視野を広げ、生徒自身で世の中を知り、そして真剣に自己と向き合うような仕組みができたらと思っています。

〈川崎繁次〉

本校の特徴や課題をKJ法により抽出することによって課題をさらに意識することができるようになった。また、各教科での取り組みや本校の生徒会行事、進路オリエンテーションや特別合同授業などの位置付けなどを、三年間を通して整理してみる事により、日常の学校生活の積み重ねが大きな力となるという事を再認識した。

4-3 部活動活性化プロジェクト

◆経過

第1回会議（9月19日）

○本プロジェクトの意義と目的を確認し、当面の活動計画を話し合った。

- ・本プロジェクトの意義・目的⇒部活動の更なる活性化。
- ・KJ法による現状把握・問題点改善点の洗い出し⇒その後「設備」「指導」「生徒に関すること」「その他」に分類。
- ・「設備」に関する議論⇒現状の設備を最大限活用しながら、大学の施設利用も視野に入れ、新たな設備については今後長いスパンで管理職に要求していくことを確認。

第2回会議（10月11日）

○「設備」についての議論の続き

- ・外部施設を利用することも今後検討。
- ・冬季野外設備が使えない間の部活動について、小中学校・大学と連携しその設備を使用することもこれから検討していくが、早急には現在の本校の施設をどうしたら最大限利用できるかを考えていく。
- ・今まで部活としては利用してこなかった本校の同窓会館（有朋館）の使用を検討。
- ・「指導」についての議論⇒指導者の講習を利用したり、外部コーチや卒業生に依頼したりすることもこれから検討。特に卒業生については過去依頼していることもあるので、積極的に活用し、人材確保の点から卒業前から声かけをしたらどうかという案も出た。
- ・「生徒に関すること」についての議論⇒文武両道を実践していくために、試験期間中の部活動禁止期間に、部単位で学習するムードを作っていくってはどうかとの提案。今後、実施計画を作り今年度中に実施していくことを確認。

第3回会議（11月5日）

○「その他」についての議論

- ・合宿・遠征については、今後必要に応じて検討。
- ・各部活動の連携や、体作りの一環として外部トレーナーを招致して合同トレーニングを行うことを提案。今後実施計画を作り、遅くとも来年度中には実施することを確認。
- ・外の部活が雨の日や冬季、トレーニング場所の取り合いにならないよう、今ある施設を最大限使ったローテーションを組むことの提案。今年度中に取り組むことを確認。
- ・冬季下校時間（5：30）の延長（6：30）を提案。教務や管理職にも相談し、今後職員会議に提案していくことを確認。
- ・総体・新人戦の前に壮行会をすべきとの提案。来年度から行っていけるように、職員会議で提案していくことを確認。
- ・このプロジェクトを通して、将来的に部活動を学校の1つの柱となるようにすることを確認。

第4回会議（11月7日）

○「試験期間中の部活動単位による放課後学習」の職員会議提案の原案審議

第5回会議（11月14日）

○職員会議に出す原案の最終調整 職員会議に原案提出。承認。

第6回会議（11月21日）

- #### ○「試験期間中の部活動単位による放課後学習」の運営について
- ・教室の手配や監督の割り当て。
 - ・人数調査のための出欠確認の手配。
 - ・アンケート原案の作成。
 - ・成績追跡。これについては出欠状況やアンケート結果を見て、実施するかどうか検討。

第7回会議（11月28日）

- 放課後学習のアンケート原案の審議
- 附属中学校との連携を見据えての情報交換。

- 今ある施設を最大限活用するため、有朋館を部活動トレーニングで使用することについて⇒3学期の職員会議で提案。

「試験期間中の部活動単位による放課後学習」開始。
「試験期間中の部活動単位による放課後学習」終了。

第8回会議（12月17日）

○アンケート集計

第9回会議（1月9日）

○アンケート集計の分析

- ・おおむね肯定的で、今後も続けていくことを確認。しかし、問題点・課題があるので、今後改善していく。
- ・有朋館を部活動トレーニングで使用することについて⇒本日の職員会議で提案。承認。利用する際の注意事項も確認。
- ・合同トレーニングについて⇒外部のトレーナーと電話でコンタクトをとり、条件などを確認。

第10回会議（1月23日）

- トレーニング場所のローテーションの作成、実施
- ・合同トレーニングについて⇒2013年6月頃実施予定。
- ・金銭面などはこれから審議していく。
- ・学校にあるトレーニング用品の確認と、不足しているものについては今後学校で購入することを検討。

第11回会議（2月13日）

○放課後学習の周知の徹底

- ・アンケート分析の結果、放課後学習の趣旨や内容がうまく伝わっていないことが判明。周知を徹底することを確認。

第12回会議（2月20日）

○研究大会にむけての準備

○部活動の備品購入について

SHで放課後学習の周知。

（2月22日）「試験期間中の部活動単位による放課後学習」開始。終了後アンケート実施。

◆今年度の取り組みの成果と反省

1) 現状把握および問題点改善点の洗い出し

- a. 改善が難しい問題（施設設備の狭さ・少なさに関わり、改善しようがない問題）

〈活動場所〉

- ・体育館が一つしかなく、屋内競技の部活動が隔日にしかできない。
- ・剣道場を剣道部・卓球部で使用しているため、活動が隔日。
- ・グラウンドの水はけが非常に悪い。
- ・グラウンドが狭く、活動に危険が伴う。

- b. 改善について模索する問題

- ・運動部合同トレーニング
- ・実施の可能性を調査（講師・時間・費用など）
- ・異校種との交流
- ・附属中学校の部活動について聞き取り（種類・指導者の現状）
- ・附属中との合同練習の可能性検討（過去の実績・問題点など）

〈指導者について〉

- ・競技経験のない顧問の場合 → 卒業生を活用できないか

- c. 改善することが可能な問題

活動場所の確保

- ・冬期のトレーニング場として、柔道場・ステージ・トレーニング場・有朋館を計画的に使用する。

* 体育科に計画立案を依頼、1月より実施。

定期考査時の放課後学習

- ・部活動だけでなく、学習面でも頑張らせるため。

* 2学期末考査時より試行

- ①実施場所 運動部（美術室）・音楽室（吹奏楽部）・理科講義室（科学部）

- ②実施時間 時間割公示（部活動停止）より考査終了前日まで

清掃終了時～午後6時30分（冬期下校時刻を延長）

- ③実施方法 教室入り口に設置した名簿に各自で記入したのち、自習。

- ④事後アンケート（資料参照）

* 学年末考査時、第2回実施

- ①実施前にプロジェクトメンバーが1・2年生のクラスで趣旨などを周知する。

- ②実施方法は第1回と同じ。

- ③事後アンケート

2) 反省

- ・放課後学習の参加部活動数・参加人数が多くはない。
- ・放課後学習参加者の満足度が低い。（とくに2年生）
- ・放課後学習の形態が定まらない。（「静かに自習」か「教え合い」か）
- ・試験期間に入ると学校に残る生徒がほとんどいなくなる。（昼食を持参しない）

◆次年度への課題・今後の計画など

- (1) 今年度、部活動活性化のためにプロジェクト会議で話題に上り、検討したが実施にまで及ばなかった企画は以下の3つである。

- a. 附属学校園内での異校種との交流。

附属高校生徒と附属中学校生徒の合同練習。
附属高校部活顧問と附属中学校部活顧問の指導者交流。

- b. 金沢大学の各部活との交流。

附属高校生徒と金沢大学学生の合同練習。
附属高校部活顧問と金沢大学部活顧問との指導者交流。

- c. 外部の専門的指導者による定期的合同トレーニング会の開催。

外部の公立スポーツセンター、私設フィットネスクラブと提携した合同トレーニング

会実施。

(2) aからcの企画については、それぞれ実施する場合に解決しなければならない問題点がある。

① aに関して今年度、附属中学校の部活動実態を調査し、技術指導できる中学校顧問の調査もした。また、中学校に対して合同練習会の可能性について打診した。中学校からは「両校の生徒、教員にとってメリットのある活動をするにについては協力して取り組むことができる」という回答をもらっている。「両校にとってメリットが有る活動」というハードルをどのように越えるかが今後の課題である。

② bでは、金沢大学の各部活と交流する場合、施設面で劣る本校での合同練習は考えにくいので、大学のキャンパスを利用した活動になることが予測される。金沢大学キャンパスと附属高校とは相当離れている。大学の部活と交流をするためには本校生徒の移動手段・方法について乗り越えなければならない問題がある。

③ cの外部の専門家の指導による外部施設を利用した合同トレーニング会は、生徒の体力向上を目指す意識を育てる上で高い効果が期待できる。ただし、これを実施する場合には指導者、施設選択の問題、実施に必要な経費捻出の問題を解決しなければならない。指導者、施設、費用の問題について現在研究中である。

(3) 次年度は今年度の活動を発展的に継承しながらも、aからcで上げた活動について、それぞれの問題点を解決する方法をより深く検討し、その実現の可能性を探る方針である。そして具体化できるものから随時、速やかに実施に移していきたいと考えている。

◆プロジェクトに参加して（各自所感）

〈前田 健志〉

このプロジェクトを通じて、限られた施設の中で

もまだまだやれることがたくさんあり、希望が見えてきた。これからも、できることから着実に積み上げ、10年後、勉強もするが、部活動が盛んな附属高校を作り上げていきたい。

〈大島 崇〉

今年度は学力保障が中心となったが、プロジェクトのメンバーとの話し合いや、山本先生からの助言を受け、限られた条件の中で出来ることが見えてきたので、次年度は部活動強化に向かって進めたい。

〈風間重利〉

本校の学校研究の中で多分ポッカリ穴が開いている空白地帯、それが部活動研究であろうと考えた。

また、一般に学力向上を目指す学校の取り組みは、部活動の縮小、軽視につながりやすい。しかし、私は経験的に部活動の縮小・軽視が決して学力向上につながらず、かえって学力低下につながる危険が高いと考え、自身の考えを実証する方法は無いかと考えてきた。以上のような理由で部活動活性化プロジェクトに参加することとした。どうしたら部活動を無理無く活性化していけるのか？無理のない部活動の活性化は学力の向上と調和するということを実証できるのか？この二つの課題を検討するのにこのプロジェクトは非常に有意義な機会となったと思っている。

〈奥村郁子〉

教員や保護者は、学生の本分は学業にありと考え、部活動より勉強が優先で当然と考えがちですが、高校生にとっての部活動の意味は、大人が考えるよりも重いものがあります。過去には、中学校まで熱心に部活動に取り組んだ生徒が、本校での部活動に対して欲求不満になり、高校生活への意欲が低下してしまうということもありました。そこで、生徒の部活動に対する意欲を学校としても理解し受けとめる必要があると考えます。部活動活性化プロジェクトによって「少人数でも」「狭くても」「時間が短くても」できる部活動のあり方を考えていけたらよいと

思っています。

4-4 生徒指導改善プロジェクト

◆経過

第1回会議（9月25日）

○問題点、改善すべき点を明確化する。

- ・学年主導の生徒指導（学年により差）
- ・遅刻の扱い。
- ・自習の扱い。
- ・コンセンサスがでない。
- ・どう指導したらいいかわからない。
- ・夏服は自由服
行き過ぎた服装
座学の授業をジャージで受けるのはよくない
のではと考える方もいる。

などの意見が出た。

まとめ…「基準の明確化・文章化」-教員のコンセンサス（共通理解）を図るべきとなった。

第2回会議（10月15日）

○問題点を整理し改善策を講じ優先順位をつけ、今年取り組む問題点を決定する。KJ法により問題点を整理し、今年度取り組む内容を遅刻指導にした。

第3回会議（11月13日）

○改善策の様々なアイデアを出し合う
(本校の現状)

- ・遅刻届無し。
- ・生徒指導部による遅刻の事後指導無し。
- ・学年、担任により差がある。
- ・遅刻は1年が少ないが学年が上がるにつれて多くなっている。
- ・朝読書（現2年は1年の総体終了の日から）
（現1年な2学期中間終了から）

〈まとめ〉

- ・朝読書への取り組みによる変化等がないか数値を

調べる。

第4回会議（11月28日）

○アイデアを精緻化する=行動計画としての仮説（見通し）を立てる。（その1）

- ・各学年の遅刻の数値を比べてみたが、朝読書が遅刻に関して効果をもたらしていると考えられる数値は読み取れない。
- ・遅刻の多い生徒の分析が必要

第5回会議（12月13日）

○アイデアを精緻化する=行動計画としての仮説（見通し）を立てる。（その2）

- ・前学年で10回以上遅刻している生徒
- ・今年度1学期遅刻の10回以上の生徒を確認

〈まとめ〉

- ・保護者懇談で遅刻の多い生徒の保護者に遅刻の多い事を告げていただく。

- ・3学期から生徒玄関にて以下の条件で遅刻のチェックをする。

* 8時35分のチャイムが鳴り始めから遅刻とみなす。

* 教室に入るまでの時間差が生じると考えられるので、週の最終日に各クラスの出席簿で確認する。

* 遅刻の累計5回で呼び出し、遅刻の原因を振り返る時間を設け、用紙に記入させる。（用紙記入後、担任の印をもらい生徒指導プロジェクトに提出）

* 3学期の始業式で生徒指導プロジェクトの取り組む内容を生徒に周知し、翌日10日より、遅刻調査開始

第6回会議（1月23日）

○実際の行動による仮説を検証、検証方法の検討・精査

〈まとめ〉

- ・遅刻累計5回した者に記入させる遅刻改善シーートの確認

・今後どうする（10回目はどうするか検討）

第7回会議（2月1日）

○今年度の取り組みに対して、生徒・教員にプロジェクトの成果を問うアンケートを実施し、その結果をまとめる。

◆今後の見通し

- ・アンケート（生徒・教員）
- ・来年度の遅刻指導をどうするか検討
- ・教員間の遅刻のラインのばらつき
- ・発表の手順

◆今年度の省察と、新たな課題の発見、次年度への課題・要望

- ・公共交通機関遅延への対応のばらつきの検討
- ・出席簿の記号の不統一

◆プロジェクトに参加して（各自所感）

〈鈴木清貴〉

今回初めて生徒指導プロジェクトとして、遅刻指導に取り組みました。生徒は遅刻を取り締まっている事に対して、大変意識していたと思います。しかし一方では、自主自立を謳ってきた附属らしくないという声も届きました。公立学校では当たり前に行われている、遅刻指導なのですが、実際に取り組んでみて、附属高校にこのような指導は、必要なのかと自問自答してしまいます。

〈千澤奈緒子〉

検討を要する事柄もあるが、今回の取り組みを通じ、遅刻が常習化している生徒の意識が確実に変化したことが感じられ、意義のある取り組みであったと思う。

〈藤田久美子〉

本校の生徒指導については、問題行動を起こす生徒もほとんどいなく、生徒自身が自己で判断し行動するという点で、細かい規則もあまり決められて

いません（問題点が全くないということではないと思います）。そこで今年度は遅刻を減らす取り組みを行う事になりました。

取り組み後、玄関で遅刻指導をしていて感じることは、ぎりぎりの生徒が遅刻をしないように走って登校する姿が見られ、遅刻する生徒の数が減ったように感じます。生徒自身が遅刻をしないよう意識してくれているように思います。しかし、まだ遅刻を繰り返す生徒もいるため、今後どのように指導していくべきかを考える必要があります。また、冬場の公共交通機関の遅延の扱いや、指導する側の共通理解の持ち方などを考えて行く必要があると思います
〈深田和人〉

本校の生徒指導は、学年団が主体であり、生徒指導部が直接生徒を指導することがない。この「県の常識、附属の非常識」を本校に導入したら、本校性はどのような対応をするかに興味があって生徒指導プロジェクトを選んだ。プロジェクトとして取り上げた遅刻指導に関しては、一定の成果はあるように思えるが、劇的に減少したとまでは言えない。今回は、反省文のみであったが、次年度も続けるなら、奉仕活動等のペナルティを導入してみてもおもしろいと思う。

4-5 学校広報改善プロジェクト

〈会議経過〉

第1回会議（9月24日）

○今後の日程を確認する。

○広報の対象と方法について

* 広報の対象をどうするか（対象を絞るのか）。

中学生だけでなく、小学生を対象とした地道な活動も大事である。例えば、小学生を対象として旧児童館や科学財団などでの取り組みを取り入れることも考えられる。

* 本校が行事を主催するのではなく、本校を会場として貸し出すことで本校を知ってもらう。

(校舎を開放する方法もある)

*広報の目的は、受験者を増やすことにあり、広い意味での広報活動で認知度を上げる。

*ホームページを介しての情報発信。

・新たに何かに取り組んで発信するというのではなく、現在行われていること、取り組んでいることを集約して発信し、宣伝する。

・できるだけいい資料を外部に出す。

・ネットだけで見てもらうことには限界がある。本校を直接見てもらう機会を作る。

○地域への貢献について

*本校は、その地域の生徒が多数集まるような学校ではないので、地域起こしのような活動は難しい。

*本校施設を、地域に開放する。

*近隣に対して、除雪などを担当を決めて実施する。

第2回会議(10月15日)

○広報の方法について

・テレビ局などへのPR活動

応援披露や歌舞伎など指導が行われていないので、必ずしも好意的な評価ではない。

・ホームページ

翌年の受験者増だけでなく受験生以外にも、広く附属高校を知ってもらう。

・パンフレット

・学校説明会

対象を中3だけでなく、中2にも拡大してはどうか。

高校の通常授業を受けるのは無理でも、体験入学のようなイベントは可能である。

7~8月よりもっと早い時期に実施(一学期中頃)

8月だけでよいのか、秋にも行ってはどうか。

・塾へのPR活動

塾への働きかけ。中学校ごとでは、本校志望

者は少数派。そのため、中学校内では会話が成立しない。中学生は、塾で附高の話をしているのが現状。

・各中学校は、何校かの公立高校に依頼して学校説明会を実施している。

○広報準備のために

・学校説明会に参加した生徒のうち、実際に本校を受検する割合はどの程度か。

(本校を選ばなかった理由などが聞けるといいのだが無理?)

・本校へ入学した場合のメリットは何か。

○広報として無理せずできる具体的な内容

・学校新聞(活版新聞)を中学校に配布する。(送り先をどうするか)

学校説明会で配布する。

・学校紹介ビデオ(生徒会作成)をCDなどで配布、またはホームページで公開する。

第3回会議(11月12日)

○受験者の減少の理由とその改善策について

・生徒の話によると、本校と泉丘高校では向こうの方が学習環境がよい。

遅くまで学校で学習できる。土日も校舎を利用できる。(誰かが来て校舎を開けている)

家で学習できず、塾に通っていて先輩から先輩に伝わっている。

・部活動では、運動部において個人では活躍できるが、団体では難しい。

・部活も勉強も両方やりたい生徒には満足できない。

・女子のセーラー服も魅力の一つのはず。ただ、スカートの丈が短いという指摘を受ける。

・広報担当の部署が必要。

PRについて、この広報プロジェクトが企画・検討するが、実務は別である。

・生徒から見た、環境・学習・部活の売りを外にPRする。

- ・教科の専門性をPRする。各教科から中学生向けの教材を提供してもらい、ホームページにUPする。
- ・受験生を増やすために、学習内容や学校行事、進学成績をPRする。
- ・台湾現地学習などの学校行事等もホームページにUPする。

部活やコンクールの結果、受験結果もホームページにUPする。

- ・合格者数で比較するのではなく、割合で比較し、本校が医学部や東大などに入れる確率が高いことをPRする。中学校へのPRが足りない。
- ・中学校訪問にかかるエネルギーをホームページ作成に割いてはどうか。
- ・中学校訪問は、一般教員でなく管理職などがまわるのが適当。できれば、一学期中にまわればよい。
- ・昔のままではダメで、本校が変わっていくしかない。
- ・本校は、規則が緩く、いい面と悪い面がある。きちんとやりたい生徒には不満。多少、はみ出すような生徒には居心地がいい。
- ・学校情事を、CDやDVDで配布する。いい面、優れている面をしっかりとPRする。
- ・勉強でも部活でも生徒会活動でも、活躍した生徒を褒めることが大事で、受験体験記をホームページに載せ、受験成績が良かったときは、それもPRする。
- ・学校紹介ビデオ、学校新聞、校歌のファイルなどをホームページで公開する。

第4回会議（1月9日）

これまでの検討を踏まえて、今年度の具体的な取り組みについて考える。

- * ホームページからの広報の対象は、在校生の保護者ではなく、中学生およびその保護者を考えている。

- * 本プロジェクトは、案であって、実施ではない。
- * 具体的な取り組みとして、これまでの話し合いで出された中でできることを考える。
- * 中長期的なものは置いておいて、当面すぐでできることを考える。
- * 中学生向けの教材をホームページUPすることは、無理か？

具体的には

- ・本校の魅力の発信として、学校紹介ビデオ、学校新聞をアップする。
- ・個人成績の紹介（部活動や個人的な活動などで）
- ・他校のHPのPRに比べて劣っているので、他校並みにPRする。
- ・中学校訪問を全員で回っている。
- ・過去の実績を紹介する。
- ・本校独自で行っていることの紹介
- ・教育実習生の受け入れ
- ・同窓生による特別授業、特別合同授業の紹介
- ・夏服自由化の過程を紹介
- ・教員研修会の実施（進路、大学入試、学校不応、AED講習会）
- ・学び合い（教師同士、生徒同士、教師と生徒）
- ・各教室にプロジェクタを設置（授業で活用）
- * これまでの問題点を分析して、

現在、どういう広報をしていて、これからどういう広報をするか、HPでの広報として、どこができていて、どこができていなかったかを明らかにして、今後はこう変更していく。

- ・過去→現在→未来の対応表を作成
- ・進路・部活動（生徒指導）・教務など分掌ごとに

- * 研究協議会では、参加した人の意見とその学校の情報の提供をお願いする。

これまで外部に提供していなかった情報を、公開する。

各校のホームページを分析し、本校と比

較・検討する。効果の判断として、訪問者数を利用。

〈今年度の取り組みへの成果と反省〉

- ①ホームページを含め、情報公開・情報発信に関する改善について検討し、今後に向けての方針を以下のようにまとめた。

【総務部関係】

○ホームページに関して

現状：2週間ごとに、行事予定とその前の2週間で行われた学校行事の様子などをホームページでお知らせするようにしている。また、行事予定表をUPし、行事予定表から行われた学校行事の様子を見ることができるよう、リンクを張った。

今後：行事の様子をお知らせするページは、多くの人に閲覧されているが、行事予定表とのリンクが十分に活かされていないので、生徒指導部の学校行事と関連付けて見やすいページ作りを心掛けたい。

○学校説明会に関して

現状：8月下旬の土曜日に、附属中学生、一般の中学生およびその保護者を対象として、参観授業を実施し、本校の紹介、入試制度の説明などを行っている。

昨年度は、参加者が増えたため、全体説明を実施した部屋が窮屈であった。そのため、今年度は、附属中学生およびその保護者と、一般の中学生およびその保護者を対象とした学校説明会を分けて、2日間で学校説明会を実施した。そのため、ゆったりとした会場で全体説明会を実施することができた。

今後：学校以外の会場を使用して学校説明会を実施することを検討し、参加者がより本校を知っていただけるように、改善を図りたい。

【教務部関係】

○ホームページに関して

現状：「教育活動」として4つのメニューが設けられているが、そのうち「カリキュラム」「学習の手引き」「週5日制への対応」はほとんど内容が変わらないので、情報が更新されていない。「特別教育活動」は、年に何度か行われる特別合同授業などのお知らせがUPされる程度である。

今後：講演会開催など、保護者が参加できるような行事については、総務部と協力してできるだけホームページでお知らせする。

特別合同授業の記録など、過去に行われた講演会などの記録についての情報もホームページで公開する。

【生徒指導部関係】

○ホームページに関して

現状：現在公開されている内容とその問題点

- ・「自由な校風」と「生徒による行事の運営」：「教育方針」のページの記述の一部としてのみ記載されている。
- ・「夏服自由化」「自由化3年目における経緯の説明」「本校における生徒の夏服について」：夏服が自由化されていることが最初に伝える構成になっていない。
- ・「部活動」：情報が古い。消滅した英語部が残っている。同好会が掲載されていない。
(※ 学校紹介パンフレットには正しく掲載されている。)
- ・「生徒会の組織」：開校記念祭の説明がメインで、執行部や議会の活動内容自身の説明がない。
- ・「生徒会行事」：写真のみで説明がない。(年間行事計画の部分から、各行事のページへのリンクはあるが、年度毎の実施報告の形態になっている。)

今後の改善

- ・「生徒指導の基本方針」のページを新設し、「校

則の一覧」にあたるものを付記する。

- ・「部活動」のページの内容を更新し、このページが表紙となるように構成を変更する。
- ・「栄光の記録」のページを新設し、部活動を中心とした、生徒のこれまでの県レベル・全国レベルでの活躍の状況や好成績を一覧で表示する。
- ・「生徒会行事」のページを作り、「組織（委員会を含む）」と「各行事の内容と性質」を説明する。
(年度ごとの実施報告のページへは、ここからリンクを張る)

【進路指導部関係】

○ホームページに関して

現状：主に進学指導を行っているが、進学結果を公表するに留まっている。その媒体は、HP、学校要覧、生徒・保護者用進路の手引きである。また、昨年より、在校生、既卒生、保護者を対象とした携帯サイト「掲示板」を立ち上げているが、本年度は更新がうまく行えていない。

進学指導の進め方は、本校のような進学校では保護者や入学希望者およびその保護者にとって関心の高いところである。その関心に対しては在校生以外には十分に対応できていなかった。

今後：「掲示板」をHPに統合し、掲載の作業を管理者へ依頼することによって、定期的な更新を実施したい。また、進路オリエンテーションなど進路行事の様子や配布資料など公開可能な資料は積極的に公開していきたい。それによって、在校生の保護者だけでなく、本校を進学先として考えている生徒やその保護者の方々に対して、本校の進学指導の考え方や流れを理解する材料を提供していきたい。

【保健部関係】

○ホームページに関して

現状：「保健指導」に、保健だよりを掲載している。
今後：保健だよりの他に、公開できる情報がないか検討し、UPできるものはUPする。また、保健だよりを毎回UPする。

【図書部関係】

○ホームページに関して

現状：図書部関連の内容をUPする項目が特に設けられていない。

今後：図書館情報を提供できるようなページを新規に作成して、情報を公開するように努める。

【研究部関係】

○ホームページに関して

現状：「研究活動」として、2つの項目「高校教育研究」「高校教育研究協議会」が準備されている。「高校教育研究」では、研究紀要のタイトルと著者のみを紹介していたが、本年度は、PDFファイルおよび金沢大学図書館にリンクを貼って、内容を見ることができるようにした。また、「高校教育研究協議会」では、研究協議会の案内を主にUPしていた。

教科の活動では、多くの教科で何もUPされていない状態である。

今後：研究紀要については、継続的にPDFファイルとして内容を紹介できるようにしていきたい。各教科の活動として、日々の授業や研究活動などをホームページで公開して多くの方々に本校の各教科での取り組みを知っていただけるようにしたい。

【情報部関係】

○HP（ホームページ）の更新について

現状：3年前まではHPの更新マニュアルがなく、一人の担当者が発信する情報を添付ファイルとして時々アップしていた。この2年は週1回以上頻繁に更新するようになった。

今年度に入って複数人でHPを更新するようになり、これまでより、多くの情報が発信されるようになった。

今後：校務分掌や教科でHPを更新できるようにしたい。必要ならばシステムを変更したり、講習会を開催する。

【教育実習部関係】

○ホームページに関して

現状：数年前は、保健体育の実習生が多く、毎年50～80人ほどの教育実習生が本校で実習を行っていたが、最近では30名程度の教育実習生が2～4週間の実習を行っている。そのときの様子など「教育実習」のページで紹介している。

今後：学校要覧などで公開している、教育実習に関する記録をホームページでも公開する。

◆プロジェクトに参加して（各自所感）

〈川谷内哲二〉

学校広報について考えるよい機会ができたと思いました。この1年間、ホームページの更新に関わってきましたが、学校広報という視点で見ること、新たに見えてくることや意識することが出てきてよかったです。続けることが大事なので、次年度以降に期待したいと思っています。

〈戸田偉〉

新たな取り組みを始めるよりも、本校が培ってきたが周知されていなかったものを広報できないか、といった方向から提言した。ただ、出せるものと出せないもの、出すべきものとそうでないものの峻別が難しく、難航した。小規模校なので、何でも出来るわけではない。優先順位をある程度つけられたことは良かったと思う。

〈横野健二〉

広報というと非常に広範な内容を想定し、雲を掴むような感覚でいましたが、実際には各中学校に対

していかに本校の優れた特徴を伝えていかに絞られたので、その後はすこし現実感がわいた状態でプロジェクトに取り組みました。現実には、お金も人材もない本校の現状では、Webを通しての情報提供をいかに強化するかが課題であることが明確になったのはよかったです。それ以外の方策をいかに摸索できるかが非常に難しく、頭を悩ませることも多かったです。また、いかに優秀な生徒を本校に集めるかが、本校の広報改善の主目的になってしまったくらいがありますが、本当にそれで良かったのか疑問を感じました。本来は本校に対する周囲の評価を高めるために、いかに本校の優れた点を外に発信するかを考えるべきだと思うのです。それを考えると、少し動機が不純かなという感もありました。

〈樫田豪利〉

広報については自分なりの考えを持っていたが、チームで話をすることによって、気付かなかった視点を発見したり、また、自分の考えに自信を持ったりと有意義であった。しかし、思いついたことを実施するには予算と時間と人的資源を必要とすることが明白となった。その点をどのようにクリアするかが大切なポイントである。さらに、どうしても発信者の都合と意識での発案となり、よくよく考えたとき、本当に受け手側の都合を考慮しているのか評価するチェックリストを作成する必要も感じた。

5. 第23回高校教育研究協議会

昨年度、3月19日（火）に「学校改善プロジェクト」をテーマに取り上げ、本校の第23回高校教育研究協議会が実施された。各プロジェクトは3月のこの研究会で公表できる一定の成果上げることが、とりあえず第一目標に研究を進めた。

研究会は午前中に授業改善プロジェクトのメンバーの公開授業と分科会を実施した。その際、通常の研究会の実施方法を少し変え、公開授業についての個々の反省会は実施せず、5教科まとめた分科

会を実施した。授業内容そのものではなく授業改善プロジェクトの視点から、学び合いがどのように授業に生かされているかという授業の工夫に焦点を当てたためである。時間があまり長く取れず、やや協議が不十分ではないかという意見も賜ったが、こちらの趣旨は概ね理解していただけたように思う。

午後からは授業改善以外の各プロジェクトに分かれて分科会が行われた。各分科会は本校からの基調発表に続き、参加者に広く意見を求め自由な討論と情報交換を進めるラウンドテーブル形式を意識しながら実施した。人数が多い分科会では十分ではないところもあったが、どの分科会も活発な意見交換が出来たのは幸いであった。

最後に福井大学の松木健一教授に「知識基盤社会が求める学力を培うための教師の専門性とは何か」というテーマでご講演をいただいた。講演の中で本校のこの取組について言及され、かなり高い評価をいただいた。参加者のアンケート調査からも非常に好評であった様子も伺える。また、アンケートでは次回の研究会も期待しており、ぜひ参加したい旨の意見も多数寄せられた。ただし、開催時期について再考を促す意見も多く、次回に向けての課題となったが、概ね研究会は一定の成果をえられたものと考えている。

6. プロジェクト全体の反省と課題

各プロジェクトの到達点は様々で、今年度ですでにかなりの成果を上げたプロジェクトもあり、新年度から早速、改善策が実施されたものもあった。一方で、今年度だけでは十分な成果が上がったとは言えず、長期的な取り組みとして次年度以降も継続しなければならないプロジェクトもあった。始動して改めて浮き彫りになった問題点や課題も多く、今後とも不断の改革へ努力を続けてゆかねばならないことを再認識させられた。

特に、改善策を実施して新たに妙案を思いついて

も、それを次にどのように、実質的に学校経営の中に取り入れてゆくのか、その仕組みが不明な場合が多かったのが大きな課題であった。このままでは、せっかくの改善策が十分に生かせないことにもなる。早急にプロジェクトと学校経営の関係を整備しなくてはならないということだろう。

6-1 学校評価との関係について

昨年の夏、筆者はつくば市で実施された文科省学校評価指導者養成研修に参加した。幸いにもグループ演習では本校の学校評価が取り上げられ、多くの先生方にご批判いただくことになった。その結果、文科省が進めている学校評価と本校の進めている学校改善プロジェクトは目指すところが非常に近いということが理解できた。

従来、本校の学校評価はあまり機能しているとは言い難いものがあった。それは、内発的なものとは縁遠い、させられている評価、するためにする評価でしかなかったからである。

しかしながら、文科省が学校評価を実施させたい理由は、学校改革の手段として有用な方法だと考えているからだという。したがって、網羅主義的な学校評価は、本来、目途ではなく不要である。評価のための評価ではなく、重点化して実効性のある学校評価を計画することが重要だという。学校評価は意思決定に関し、可視化することによって、学校経営を透明化する機能を持っている。教師間のみならず第三者による学校評価に際しても、学校理解を進める有効な手段になってゆくことが期待されている。

このような文科省の趣旨を鑑みると、ボトムアップで取り組んできた本校の学校改善プロジェクトこそ、真の学校評価として機能させるに相応しいのではないかと思う。このプロジェクトを学校評価の重点化目標にしてゆくことが、網羅主義から脱し、真に実行力のある学校評価に結び付ける最善の方法であるとも考えられまいか。逆に、改善プロジェクト

を本校の学校運営に効果的に取り入れる最も有効な方法でもあるのではないだろうか。つまり、改善プロジェクトを学校評価の中にうまく取り入れる事ができるかどうか、このプロジェクトを実りあるものにしてゆけるかどうかの分岐点となろう。

逆の見方をすれば、学校改善により実行性のある学校評価に改正する絶好の機会でもあるということだ。この機会に改めて現行の学校評価の項目を精査するとともに、次年度の重点化項目を検討することが必要になってくるだろう。

その際、各プロジェクトは、取り扱う課題の範囲や進言・提言する分掌など各々異なり、一概に並列的に扱うわけにはいかないということは考慮すべきだろう。取り組むべき課題を、分類・整理し直したうえで、プロジェクトの候補を選出することが不可欠となる。そこで、次年度に向けて、以下表2のように公務分掌ごとに課題を整理し、便宜的に新たなプロジェクトを提案した。そして、各プロジェクトの目的は、その改善の成果を、該当する分掌に提言し、学校評価に生かすこととした。

また、学校評価として取り入れる場合、最も重要

なのは、各プロジェクトの「達成目標」と「評価基準」を明らかにすることであり、発達段階と成長を見据えて本校としてふさわしい評価基準を考えることであろう。今後は、この評価基準を決定する作業・調整も大きな課題として我々に突き付けられてゆくことになろう。

6-2 次年度の学校改善プロジェクトについて

以上を踏まえて、次年度も今年度と同様に諸プロジェクト第二期目を立ち上げることとなった。ただし、候補となる個々のプロジェクトは次のように絞ることとなった。

まず、「進路指導改善プロジェクト」・「学校広報改善プロジェクト」は本年度の活動で一応の区切りがついたと判断し、次年度は候補にしない。「授業改善プロジェクト」については、教師である以上、授業研究は必須であり、全員が経験すべきものである。常設のプロジェクトとし、教員全員が輪番で担当してゆくために次年度も設ける。「生徒指導改善プロジェクト」も満足な段階に達しておらず、希望者があれば次年度も引き継ぐこととする。

表2 各プロジェクトの整理

公務分掌	カテゴリー	
総務部	学校経営	・担任業務, 学年運営改善プロジェクト ……今年度実施
		・学校組織再編プロジェクト
		・学校開放, 地域連携プロジェクト ……今年度実施
		・学校広報改善プロジェクト ……昨年度実施
	研究	・大学との連携研究強化プロジェクト
教務部	学力向上	・授業改善プロジェクト ……昨年度から継続実施
		・総合学習改善プロジェクト
		・不適応生徒対策改善プロジェクト ……今年度実施
生徒指導部		・生徒指導改善プロジェクト ……昨年度から継続実施
		・部活動活性化プロジェクト ……昨年度実施
		・生徒会活動活性化プロジェクト
進路指導部		・進路指導・キャリア教育改善プロジェクト ……昨年度実施

※各プロジェクトはその改善の成果を、該当する分掌に提言することを目的とする。

その他、新たに加えた「担任業務・学年運営改善プロジェクト」を含め、昨年度、候補に挙がった「学校開放・地域連携プロジェクト」、「不適應生徒対策プロジェクト」、「学校組織再編プロジェクト」、「大学との連携研究強化プロジェクト」、「総合学習改善プロジェクト」、「生徒会活動活性化プロジェクト」のうちから希望調査によって5つのプロジェクトを選ぶこととなった。希望調査の結果、次年度立ち上げるプロジェクトは資料3に示す通りとなった。

〈資料3〉 学校改善プロジェクトⅡ（第二期目）の選定および構成メンバーについて

プロジェクトⅡ	構成員（○印はリーダー）
①授業改善プロジェクト	○外山，金森，深田，鈴木，酒井
②不適應生徒対策改善プロジェクト	○柴原，島村，川谷内，隅
③生徒指導改善プロジェクト	○藤田，樫田，横野，千澤
④学校開放・地域連携プロジェクト	○渡會，奥村，山本，戸田
⑤担任業務・学年運営改善プロジェクト	○大島，前田，高橋，川崎，

7. おわりに

「互いに学びあう学校づくり」というカリキュラムマネジメントや学校運営に関わる研究は小学校や中学校においては比較的馴染みがあるテーマである。1990年の前後から、「学びの共同体」が流行した時期もあった。しかしながら、義務教育ではない高校では学校によって設立趣旨や目標が様々であり、このような研究の取り組みはかなり遅れているのが現状である。そこにあえてメスを入れてみようというのがこの「学校改善プロジェクト」である。また、このプロジェクトは高等学校での実践としては稀有であるだけでなく、授業のみならず学校活動全般に

わたる取り組みこそが真正な「学びの共同体」の形成であると考え、実施していることも大きな特徴であろう。研究としては緒についたばかりだが、学校現場が直面する教員の世代間の不均衡や、独自の学校風土の継承・発展に鑑みて、その意義は決して小さくはないと考えている。

前出したように、通常業務で忙しい中、各プロジェクトはそれぞれ何度も討議を重ね、アイデアを出し合い、改善に向けて努力をした。

次年度以降は、今年度の活動をどのように次年度以降も継続させてゆくのか、各プロジェクトの試みを、どのように学校運営に取り入れてゆくのか、など多くの課題が残されている。

しかしながら、今年度、各教員が積極的・主体的にこのプロジェクトに取り組んだこと自体が、大いに学校の活性化につながったのではないかと多くの先生方が感じている。この学びあう雰囲気を作り出したことこそが、このプロジェクトの最大の成果といえるのかもしれない。

（研究部 高橋）

